

愛国心の否定こそ危険

戦後わが国では、人間の本質を利己的なものととらえる傾向が強くなった。そのため国家や社会のために尽くせと教えることは、ある種の「危険思想」と受け止められがちだった。

だが人間の本質は、利己主義にとどまるものではない。誰でも、自分以上に大切な誰かを持っている。それが親であれ、子であれ、妻であれ、恋人であれ、その愛する者の生命、身体に危難が迫ったとき、人は誰でも、わが身の危険を忘れて救出のため挺身するのであろう。決して「自分だけがこの世で一番大切な存在」ではないのである。

「何ものかのために、己をささげ尽くしたい」これは神が人間に与えた最も高貴な内的衝動なのではないだろうか。だが、そのような愛、犠牲的な精神は、そのままでは家族や恋人、友人など、個人的範囲にとどまりやすい。これをさらに、職務や社会、さらに国家へと拡大していくものが教育ではないだろうか。

私が勤務する私立高校でも、自分の個人的利益より学校全体、生徒全体の利益の方を重視して行動する教職員は、決して少なくない。教頭と「彼女は公あって私なしだからな」と笑うことがある。そのような人物にとっては、学校や生徒の利益、幸福が、彼あるいは彼女の自我と切り離しがたく融合してしまっているのである。なんとすがすがしい人たちであろうか。

学校に限らない。その自我が職場そのものと融合してしまっている人間は決して珍しいものではない。昨今これを「仕事人間」などと揶揄（やゆ）する傾向が強いが、恥ずべき考えだと私は思うのである。

その愛の対象を、家族から社会へ、社会から国家へと拡大していった人間をわれわれは英雄と呼ぶ。しかし現在のわが国は、なんと英雄に乏しい国家になり下がってしまったことであろうか。

「個人は善、国家は悪」ととらえる戦後思想は、人間性そのものを矮小化し、国民から高く生きる気概を奪い去った。その弊害は、今や国の存亡を危うくする規模にまで達している。

政治家は本来、国家のために死すべき崇高な仕事である。しかし最近では、政治を己の利をむさぼる手段と心得るようなものも数多く出現してきた。近隣諸国と通じ、国家、国民を売り渡すような分子さえいる。官僚の多くは、命を縮めるほどの辛苦を重ねて国家を支え続けててくれている。しかし、ごく一部とはいえ、公益を忘れて私利に走る輩もいないわけではない。

国家や社会の根腐れとも評すべき、このような状況を生み出したものは、国家、公益を軽視し続けた戦後教育そのものではないだろうか。

ここに至ってなお、愛国心の育成を危険視する傾向が与野党内に存在し、ために教育基本

法改正の今国会成立は見送られようとしている。

だが、人は己自身の利益のみを追い求めたのでは、ついに幸せになることができない生き物である。愛国心の育成を否定して、人間性の健全な育成など考えられるものではない。危険なのは愛国心ではなく、それを危険視する時代錯誤なのではないだろうか。

(平成 17 年 2 月 2 日付け産経新聞掲載)